

プレゼンテーションⅢ 「四旬節一回心と入信の秘跡の準備」

具 正謨（日本カトリック典礼委員会委員）

教会には、4世紀の初めごろから過越祭を3日間祝う習慣が、そして4世紀の後半からは四旬節の制度が現れました。それ以来、40日間の四旬節と3日間の過越祭は、教会の暦の中でも最も重要な時期として過ごされるようになりました。初めに、3日間と四旬節の歴史的な変遷を簡単に検討した後、第2バチカン公会議によって刷新された典礼とそれが含む霊性について考察したいと思います。

古代の教会

4世紀の初め、教会では過越祭を3日間祝う習慣が定着していました。しだいに40日間の準備期間としての四旬節も発展していきますが、ローマでは最初のころは6週間ではなく3週間であったとされます。4世紀半ばの「聖書朗読表」には3週間続けてヨハネ福音書が読まれるようになっていましたし、第2週目を *Hebdomada in mediana*（中間の週）と呼んでいました¹⁾。しかし、4世紀の後半になるとその準備期間は6週間に延ばされ、正式名としては *Quadragesima*（四旬節）と呼ばれるようになりました。四旬節は第1主日に始まり、6週目の聖木曜日の最後の晩餐の典礼まで続きました。

聖金曜日からは「3日間」の過越祭が始まりました。アンブロシウスやアウグスティヌスは説教の中で、「イエスの十字架と死と復活の聖なる3日間」という表現を使い、「聖なる3日間は、洗礼志願者が洗礼を通してイエスの十字架の死と葬りと復活にあずかる時間でもある」とされました。彼らによると「3日間」は、受洗者が受ける一つの統合された恵みとして理解されます（古い自分が亡くなり、新しい自分に生まれ変わる）。受洗者はその実りを豊かに体験するために、聖金曜日と聖土曜日には断食を厳しく守りました²⁾。

レオ大教皇（在位440-461年）は四旬節の説教で信者たちに、霊的にもっと進歩するように励ましますが、その内容をまとめると次のようになります。信者は四旬節の間、自分たちが受けた洗礼の

意味を改める。洗礼の恵みを十分に生きることができなかつた場合は、悔い改める必要がある。四旬節はまた洗礼志願者にとっても特別な準備の期間である。教会全体は洗礼志願者がふさわしく洗礼にあずかることができるように一緒に祈り、断食し、慈善活動をする。とくに断食は霊的な戦いのために大切にされる、というような内容です³⁾。

四旬節の間の断食は、日曜日を除いて34日間行われました。また、「3日間」のうちの聖金曜日と聖土曜日にも断食するので、総計36日間断食が行われたこととなります。一方、当時の東方ビザンティン典礼では四旬節が7週間設けられていましたが、土曜日と日曜日の両日が断食から除かれたので、断食の日数は西方教会と同じく34日になりました。

中世の教会

5世紀以降、新たな発展が見られます。それは、第2バチカン公会議による典礼刷新まで続くことになりました。5世紀後半になると成人洗礼は幼児洗礼に取って代われ、それが四旬節と過越祭の意味にも変化をもたらしました。まず、過越祭は「3日間」ではなく、復活の日曜日を意味するものになりました。9世紀のメツのアマラリウスの『司教儀式書』を見ると、「3日間」とは、聖木曜日、聖金曜日、聖土曜日のことを指しています⁴⁾。この儀式書によると、「3日間」とはイエスが墓にいた期間を示します。「3日間」とは、いわば四旬節の続きであり、四旬節の最後の段階として考えられるようになったのです。そこで、イエスの「死」と「復活」は典礼的に分離されていくこととなりました。四旬節の続きとしての「3日間」に並行する形として、復活祭における第2の「3日間」という習慣が現れました。復活の主日、復活の月曜日、復活の火曜日がそれにあたります。

また、時間がたつにつれ、四旬節の期間が延ばされる傾向が現れました。グラシウス秘跡書には *Quadragesima*（四旬節）とともに *Quinquagesima*（五旬節）の習慣が見られますが、これは東方教

会からの影響であると考えられます。同秘跡書は **Quadragesima** の前の週の水曜日を四旬節の始まりとしましたが、それによって四旬節が始まる前の週の水曜日と金曜日に断食をする習慣が定着することとなりました。続いて6世紀の終わりごろには **Sexagesima** (六旬節) が、7世紀の初めには **Septuagesima** (七旬節) として発展していきましたが、それによって悔い改めの日数も増えました。それらの試みは、40日間の準備を40日間の「断食の日」に合致させることでした。グレゴリウス大教皇(在位590-604年)の説教において、「四旬節とは40日間断食したモーセ、エリヤ、イエスの模範にならう期間である」とされています⁵⁾。

8~9世紀にかけて、水曜日を四旬節の始まりとする傾向はいつそう広まりました。同時に信者たちはその水曜日に罪を告白し、アダムの罪によってもたらされた死を象徴する灰を受けるようになりました。それによって中世盛期からの四旬節は、(1)「灰を受ける水曜日から始まって聖土曜日に終わる」、(2)「40日間の断食の期間」になりました。また、日曜日や祭日には断食が除外されたので、四旬節の実践はたびたび中断されました。

1955年の聖週間の典礼改定以降

1955年に教皇ピオ12世によって聖週間の典礼が改定されたとき、中世以来続いていたものがまだ残っていました。「3日間」の聖木曜日、聖金曜日、聖土曜日は四旬節の最後の時期として考えられ、改定された聖土曜日の復活徹夜祭は四旬節から復活節への移行の瞬間として考えられました。そのため、司祭はその儀式の途中に紫の祭服から白の祭服に替えました。

1966年、教皇パウロ6世が四旬節の間の断食の義務を「灰の水曜日と聖金曜日だけに縮小する」と発表したとき、四旬節の意味も変わりました⁶⁾。同教皇は断食だけでなく、成人洗礼における特別な洗礼準備制度(catechumenate)が四旬節の典礼の中に組み込まれるようにしました。1969年の「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」では古代教会が堅持していた四旬節と「3日間」が修復され、聖金曜日の断食に加えて「適当であれば聖土曜日にも、復活徹夜祭まで、どこでも過越の聖なる断食が行われる」(20番)とされました。四旬節は主の晩餐の夕べのミサの直前まで続きます⁷⁾。そして、過越祭(pascha)はイエスの死と葬りと

復活を同時に祝う「3日間」を指しています。

現代における四旬節の意味

「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」27番は四旬節について次のように記しています。「四旬節は、復活の祭儀(=「3日間」の祭儀)を準備するために設けられている。四旬節の典礼によって、洗礼志願者はキリスト教入信の諸段階を通して、また、信者はすでに受けた洗礼の記念と償いのわざを通して、過越の神秘の祭儀に備えるのである」。この表現から、現代における四旬節の特色が3つ浮かび上がります。

第1に、四旬節は復活祭を準備するための期間です。人間の営みの中で「準備」とは非常に大切な行為です。準備をよくすることによって、自分がめざす目標にいつそう近づくことができるからです。たとえば、オリンピックの選手が普段の準備なしにメダルを獲得するのは難しいことです。また、受験生は自分がめざす大学に入るために最善の準備をしなければなりません。典礼に関しても同じことがいえるでしょう。日曜日の典礼が恵み豊かなものになるためには、共同体全体が1週間をよく準備しておく必要があります。四旬節は、6週間という、典礼暦の中でも最も長い準備としての期間をもっています。それだけ過越祭が大切な祝祭であることを示しています。

第2に、四旬節は洗礼志願者にとって特別な期間です。第2バチカン公会議は、「ミサ典礼」とともに「成人の入信制度」に大きな刷新をもたらしました。『典礼憲章』は、洗礼の恵みが受洗者においてより豊かに実るためには、(1)一定の期間の中で、(2)共同体全体とともに、(3)典礼暦に沿ったカテキズムが行われる必要があると述べています。また、受洗日を復活徹夜祭に定めることによって、すべての準備が過越祭に向けられているということを示しています。

第3に、四旬節は、信者がすでに受けた洗礼の恵みを新たに作る期間です。信者は償いを通して回心を深めます。キリスト教は伝統的に、飲食の節制を通して償いの実践を大切にしてきました。1983年に発布された新しい教会法は、刷新された典礼規範に合わせて、「四旬節における小斎と大斎は、灰の水曜日と受難の金曜日に遵守する」と定めています(1251条)。

四旬節は聖週間にその頂点を示しますが、その

期間の典礼においてイエスの愛の深さが最もよく現れます。四旬節におけるさまざまな準備は、イエスの愛にならうために設けられているのです。

現代における聖なる過越の3日間の意味

「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」は、「3日間」について説明をしていますが、その内容を要約すると次のとおりです。「主の受難と復活からなる過越の聖なる3日間は、全典礼暦年の頂点として輝きを放っている」(18番)、「過越の3日間は、主の晩餐のタベのミサに始まり、その中心を復活徹夜祭におき、復活の主日の『晩の祈り』で閉じる」(19番)、「聖金曜日に、また適当であれば聖土曜日にも、復活徹夜祭まで、どこでも聖なる断食が行われる」(20番)。

これらの説明からも分かるように、「3日間」は、主の受難と死と復活とを一連のものとして祝う典礼です。前述のように教会は中世の間、イエスの受難と死は地上における宣教の終わりとして、復活は地上とは異なった天上におけるイエスの新しいのちの始まりとして、二分して考える傾向がありました。しかし、現代の教会は古代教会の伝統を修復し、イエスの受難と死と復活は切り離すことができない連続的な出来事として理解しています。キリスト教信仰において、復活の様相は受難と死の中にすでに含まれているということです。

「3日間」において行われる典礼を紹介すると次の通りです。まず、「3日」の数え方は、ユダヤ教の伝統に従っています⁸⁾。それゆえ、聖木曜日の夜から聖金曜日の夜が来るまでが第1日目、聖金曜日の夜から聖土曜日の夜が来るまでが第2日目、復活徹夜祭が始まる聖土曜日の夜から復活の主日の晩の祈りまでが第3日目に当たります。各日の典礼内容を見てみると、第1日目は、主の晩餐のミサと聖金曜日の主の受難の祭儀が行われ、第3日目は、復活徹夜祭のミサと復活の主日の日中のミサが行われます。これに対して、第2日目に当たる聖金曜日の夜から聖土曜日の夜までは、「教会の祈り」と「聖体訪問」以外、ミサと関連した典礼は行われません。すなわち、第2日目は、キリスト教の1年間の暦の中で、唯一ミサ典礼が行われない日なのです。この日、全教会は断食を行って、イエスが担った人類の苦しみを身をもって体験するのです。

成人のキリスト教入信式

第2バチカン公会議による入信制度の変化について、『典礼憲章』64条は次のように述べます。「数段階に分けられる成人の洗礼準備制度が復興されなければならない。この実行は、地区裁治権者の判断による。こうして、適確な教育を目的とする洗礼準備期間が、順次に行われる聖なる儀式によって、聖化される」。

この文章は洗礼の秘跡の実行におけるいくつかの変化を示していますが、その中でも「洗礼準備制度」(catechumenate)の復興は特記すべきです。「洗礼準備制度」とは、もともと古代教会の洗礼準備制度でしたが、中世には幼児洗礼が増えるにつれて行われなくなりました。

3世紀初期の文献とされる『使徒伝承』には、「洗礼準備制度」の詳しい内容が記録されていますが、現行の「洗礼準備制度」はそこから洞察を得ています。信仰を求めて教会を訪れる人は、生活状態や職業などにおいて準備ができていのかどうか調べられます(16章)。その後、「神の言葉を聴く期間」が3年間設けられます(17章)。同書の18~19章には、3年間にわたる求道者養成の内容が具体的に提示されています。それによると、最も大切なことは典礼の中で朗読され、説かれる「みことば」に参加することです。その他、キリスト教的な祈りや慈善の実践を学ぶことも挙げられています。求道者の養成は、教師をはじめ、共同体全体がかかわることになります。また、20章には、特定の期間における特別な準備と、それに続く「3日間」の行いのことが記されており、悪霊から守られるための按手や断食などが強調されています⁹⁾。

洗礼は、(聖)土曜日の夜を徹夜した後、「鶏の鳴くころ」(21章)に始まる典礼(=復活徹夜祭)において授けられました。洗礼式は3回にわたる質問、すなわち父と子と聖霊である神を信じるかという司式者の質問に、「信じます」という受洗者の応えによって成り立ちます。新しい受洗者は洗礼堂から教会堂に導かれ、司教と信者によって迎え入れられます。司教は歓迎のしるしとして按手と接吻を与えますが、それによって彼らは共同体の一メンバーになります。その後、感謝の典礼が続き、受洗者は初聖体を受けました。

『使徒伝承』を基にして作られた現行の「洗礼準備制度」は、2つの軸をもっています。第1は

典礼暦を中心とする時間軸であり、第2は教会共同体全体を中心とする空間軸です。それゆえ洗礼式は、暦の頂点である復活徹夜祭に、共同体とともに行われるのです。この2つの軸をまとめ上げるのは、毎日曜日のミサ典礼です。3年間のミサ典礼を忠実に行うことによって、求道者は共同体の中でイエス・キリストの神秘に徐々にあずかることになるのです。

『典礼憲章』64条は、このような「洗礼準備制度」が段階的に行われることを強調しています。それは、(1)「順次に行われる聖なる儀式」と(2)「適確な教育」によって構成されたものとして、「聖化」がその目的です。すなわち、洗礼の目的は、入信する人を含む共同体全体の聖化ですが、聖化の恵みが洗礼式を通してよりよく体现されるためには、一定の区切られた期間とそれに伴う儀式が必要であるということです。

「成人のキリスト教入信式」の儀式書は、その展開を具体的に示しています。それによると入信式は、(1)求道期前の期間、(2)求道期、(3)洗礼準備期、(4)入信の秘跡直後の期間という4つの違う期間を通して行われます。

一定の期間から次の期間に移る際には儀式が伴います。求道期前から求道期に移るときには「入門式」が、求道期から洗礼準備期に移るときには「洗礼志願式」が、そして洗礼準備期から入信の秘跡の直後の期間に移るときには「入信の秘跡の祭儀」（復活徹夜祭における洗礼、堅信、初聖体の総称）が行われます。

儀式と期間によって特徴づけられる新しい入信

式は、信仰を「旅＝プロセス」として捉えるところが特徴です。洗礼のときに与えられる恵みは、その前後に設けられる教育の期間と儀式に本質的につながっています。それは簡単にいえば、洗礼による恵みは自動販売機の商品のように自動的なものではなく、神の恵みに応える人間側の人格的な順応性に比例するということを暗示しています。恵みとは、何かのもののようなことがらではなく神の愛そのものであるので、受け入れる人間の自覚した受託があって初めて目に見える形として表れるということです。入信式が長いプロセスと種々の儀式を設ける理由は、神の恵みに応えていく人間の順応性を考慮したことにあるのです。

現代の学際的な研究結果によると、人間の情緒的、知的、倫理的、宗教的な成長や成熟は、一息にではなく一生をかけて徐々に起こる現象であることを検証しています。それは、人間が身体的な存在であるということが前提にされています。神の恵みによる人間の変容にも同じことがいえます。聖パウロの回心体験のように場合によっては神の恵みを劇的に体験する人もいるかもしれませんが、通常は、神の恵みが人間存在全体に吸い込まれ、体现されるまでには長い時間がかかるのです（聖パウロは回心から公の宣教に出るまで約3年間待ちました）。現代における入信制度が、場合によっては数年間に及ぶ準備の期間を設けている理由もそこにあります。それは神の恵みがただ頭だけではなく、心と体に深く受肉していくための期間なのです。

1) 「中間の週」は、現在の暦では四旬節第5主日になっている。詳しくは、A. Adam, *The Liturgical Year: Its History and Meaning after the Reform of the Liturgy*, New York, 1981, 91ff 参照。

2) Letter 23, 13, Trans. Mary Melchior Beyenka in FC (*The Fathers of the Church*) 26, p. 194.

3) *Sermon* 39-49, in NPNF (*Nicence and Post-Nicence Fathers*) 12, pp. 152-161.

4) *Liber Officialis* I, XII, 33., ed. J.M. Hansens, *Amalarii Episcopi Opera Liturgica Omnia*, 3 vols., Vatican City: Biblioteca Apostolica Vaticana, 1948, II, pp. 78-79.

5) *Homilia XVI in Evangelia* 5, in PL (*Patrologia Latina*) 76, p. 1137.

6) 教皇パウロ6世使徒憲章『ペニテミニ（1966年2月17日）』II-3 (*Paenitemini*)。

7) 現在の四旬節は日曜日にも含まれるので、灰の水曜日から聖木曜日まで全部で44日間にわたる。

8) ユダヤ教において一日は前日の日暮れから次の日の日暮れまでである。

9) 『使徒伝承』は、それらの期間が「四旬節」もしくは「聖なる3日間」と直接関係するかどうかについて明記してはいないが、この講話では一般的に認められている学説に従い、四旬節や聖なる3日間の期間をさすものとみなす。詳しくは、『聖ヒュッポリュトスの使徒伝承』土屋吉正訳（オリエンズ宗教研究所、1983年）38-59頁。